

FLORA KANAGAWA

Aug. 8. 2006 No.62

神奈川県植物誌調査会ニュース第 62 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会
TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846
<http://nh.kanagawa-museum.jp/~kana-syoku/>
e-mail katsu@nh.kanagawa-museum.jp
郵便振替 00230-5-10195



タシロラン。2006年7月8日 亀谷邦雄氏撮影。
詳しくは本文 771 ページを参照してください。

田村 淳・山本幸子：丹沢でタキミシダを発見	764
逢沢峰昭：これまで確認されていない場所にかつて生育していた可能性を示す植物	764
逢沢峰昭：丹沢三ッ峰にアスナロの自生群落を発見す	766
逢沢峰昭：丹沢三ッ峰にシラビソの若木を発見す	768
松本雅人：大和市上和田（宮久保）の帰化植物	769
勝山輝男：ヒメフタバランが健在	770
亀谷邦雄・浜口哲一：横浜市戸塚区でタシロランを発見	771
浜口哲一・長谷川義人・三輪徳子：小原敬先生の著作について	771
堀川美哉・武智憲治・田中徳久：横浜ブロックからのお詫びとお知らせ	776
田中徳久・高橋秀男・堀川美哉：『神植誌 01』刊行後の横浜ブロックの標本登録実績	777
事務局：2006 年度総会報告	777

丹沢でタキミシダを発見

(田村 淳・山本幸子)

2006年3月12日に山北町内で丹沢新産となるタキミシダ *Antrophyum obovatum* Baker を発見したので報告する。

タキミシダは千葉県を分布の東限とし、富山県を分布の北限とするシダである(中池 1992)。生育地での個体数が少ないことから、環境省レッドデータブックでは絶滅危惧 I B 類に位置づけられている。神奈川県内の近隣では、静岡県駿河地方や伊豆地方(細倉 2000)と千葉県南部(中村 2003)で分布情報があげられている。しかし、一部を除き株数は非常に少なく、かつ数 cm 程度の株しかないようである。神奈川県内の記録は、これまでに湯河原町奥湯河原(大谷 1976)、葉山町森戸川(青木清勝 1988.2.28 KPM-NA100853)、そして FK58 号で出川洋介氏が紹介した小田原市入生田がある。このうち現存するのは入生田の 1 株であるが、ソーラスはつけていない(出川 2004)。これらのことから、本報告のタキミシダは神奈川県に現存する 2 株目であり、分布の東限である千葉県の株につぐ貴重なものと考えられる。

発見したのは山北町内のある場所であり、沢沿いの岩壁に 1 株が着生していた。葉は 6 枚つけており、最長で 15cm、他に 10cm 程度の葉が 4 枚あった。これら 5 枚はいずれもソーラスをつけていた。丹沢にタキミシダが、しかもソーラスをつけた大きな株が生育しているとは正直予想外であった。この発見で、丹沢の山麓部のシダフロラが豊かであることを再認識した。今後も引き続き丹沢をはじめとする神奈川のシダとつきあっていきたい。

引用文献

- 出川洋介, 2004. FLORA KANAGAWA, (58): 723-725.
細倉哲徳, 2000. 東駿・北豆のタキミシダ. 東駿・北豆のシダ, (1): 49-52.
中池敏之, 1992. 新日本植物誌シダ編改訂増補版. 868pp. 至文堂, 東京.
中村建爾, 2003. タキミシダ. 千葉県の自然誌 別冊 4 千葉県植物誌, p.63. 千葉県, 千葉.
大谷 茂, 1976. 神奈川県の羊歯植物 (8). 横須賀市立博物館研究報告, (22): 17.

これまで確認されていない場所にかつて生育していた可能性を示す植物 (逢沢峰昭)

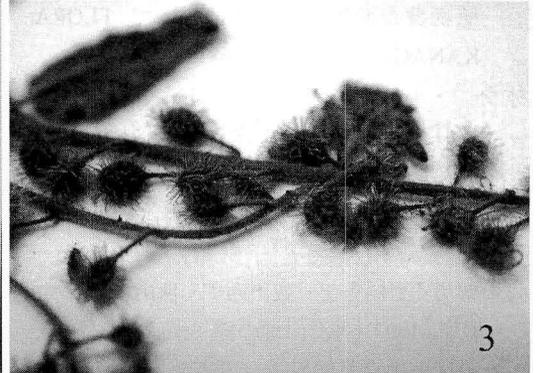
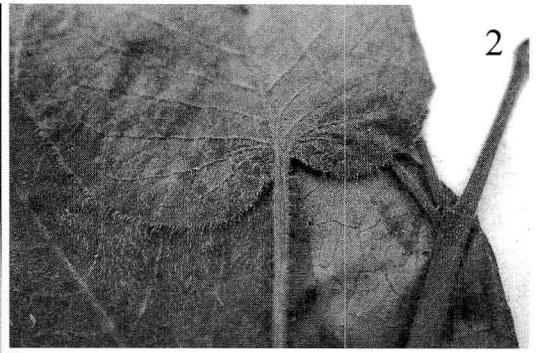
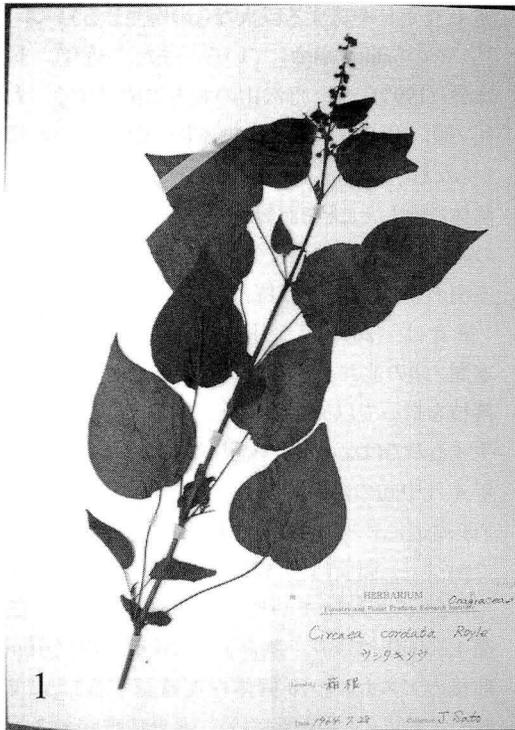
これまで生育の確認されていない場所に、かつてその植物が生育していたことを示す標本や資料の存在は、その種の消失した時代やその要因を推察する上で、また、その種の生育を再確認するための情報として重要であるといえる。本報告ではこれらの情報をもつ植物について取り上げたい。

箱根産のウシタキソウ

森林総合研究所標本室 (TF) に箱根産のウシタキソウの標本があった(図 1)。全体的に毛が密生しており、葉の基部は心形から円形(図 2)で、果実には硬いかぎ状毛がみられる(図 3)。これらの特徴からウシタキソウ *Circaea cordata* と同定できる。標本ラベルには「ウシタキソウ 箱根 1964.7.28 J. Sato」とあり、採集者の「J. Sato」は、他の標本ラベルに記載された採集者名から植物研究家の佐藤潤平氏であるとわかった。ウシタキソウは、これまで神奈川県内では、箱根の分布記録はなく、津久井町青野原、城山町および藤野町で採集されているのみである(神植誌 2001)。本標本はウシタキソウが箱根地域に分布していたことを示唆するものであるが、具体的な採集産地名が無いことが悔やまれる。なお、念のため東京大学の標本庫 (TI) も調べたが、神奈川県産のウシタキソウ標本はなかった。

丹沢山山頂のサンショウバラ?

サンショウバラ *Rosa hirtula* は、現在、神奈川県内では箱根周辺と西丹沢三国山～不老山にかけての尾根筋に分布しているのみである(神植誌 2001)。林ほか(1961)には、塔ヶ岳や丹沢山に稀に生育しているのを見たとの記述があり、この記載を裏付ける標本〔丹沢山 蛭ヶ岳及び檜洞 1956.7.20 林弥栄・小林義雄 (TFA)〕が、これまで筆者の標本調査により見つかっているだけであった(逢沢 2003)。ところが、ハンス・シュトルテ著(1995)「続々 丹沢夜話」の 97 ページには、「サンショウバラ」とされる木の含まれた写真があった。この写真は、1951年8月17日



ウツタキソウの標本. 図1: 全体, 図2: 葉, 図3: 果実.

に丹沢山山頂の草葺き小屋を撮ったものであり、その小屋の左側に白っぽい大きな花をつけた低木が写っている。そして、98 ページの本文中には「(草葺き小屋の) 側にサンショウバラが咲いていた」とある。この写真を見ると、樹高は3mほどの直立した低木で、花は単生状でまばらについている(図4)。写っている人物の大きさから推測すると、花はかなり大きいことがわかる。丹沢の主稜線部に生育するフジイバラ、オオフジイバラは、いずれも花径は2~3cm程度で、花序に比較的多くの花をつけるのに対して、サ

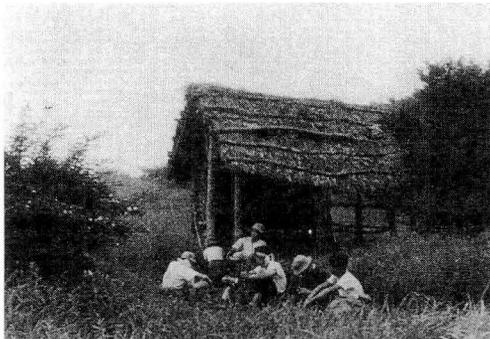


図4: ハンス・シュトルテ (1995) の97 ページの写真. 丹沢山頂の草葺き小屋 1951.8.17 (転載).

ンショウバラの花径は5~6cmと大きく、花は単生する(大橋ほか1989, 神植誌2001)。この点を考慮すると、写真にある樹種はサンショウバラのように見えるが、いかがだろうか。

丹沢山塊のミヤマヨメナ

ミヤマヨメナ *Aster savatieri* は、神奈川県内では数ヶ所で採集されているが、ミヤコワスレの名で栽培されたものが逸出したものと考えられている(神植誌2001)。丹沢山塊では林ほか(1961)に大山(稀)とあるが、勝山ほか(1997)は、植えられたものを記録した可能性を指摘している。ところが、平凡社『日本の野生植物 III 草本合弁花類』にあるミヤマヨメナの写真(PL. 162)は、神奈川県丹沢山地産(東京都八王子市植栽)とあった。もしこの情報が正しければ、ミヤマヨメナは丹沢山塊に分布していたことを示唆している。

[これは筆者の推測にすぎないが、林弥栄氏ほかは八王子市にある旧浅川実験林(現森林総合研究所多摩森林科学園)の職員であったことから、ひょっとしたら、このミヤマヨメナは丹沢山塊で林氏らによって採取・移植されたものではないだろうか]

最後に標本閲覧を快諾していただいた、森林総合研究所植物群落研究室並びに東京大学総合博物館の関係者の方に感謝いたします。また、文献資料をご提供いただいた植物誌調査会（東京大学大学院）の北川淑子氏にお礼申し上げます。

引用文献

逢沢峰昭, 2003. 「林ほか (1961): 丹沢山塊の植物調査報告」の標本について. FLORA KANAGAWA, (55): 673-683.

林 弥栄・小林義雄・小山芳太郎・大河原利江, 1961. 丹沢山塊の植物調査報告. 林試研報, 133: 1-128.

ハンス・シュトルテ著, 1995. 続々 丹沢夜話. 246 pp. 有隣堂, 横浜.

勝山輝男・高橋秀男・城川四郎・秋山 守・田中徳久, 1997. 丹沢山地の種子植物・シダ植物. 丹沢大山自然環境総合調査報告書, 丹沢山地動植物目録, pp. 331-382. 神奈川県.

神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物誌 2001. 1584pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原. (本文中では神植誌 2001 と略記)

大橋広好・初山泰一・大場秀章, 1989. バラ科バラ属. 日本の野生植物 木本 I . pp. 199-204. 平凡社, 東京.

丹沢三ッ峰にアスナロの自生群落を 発見す

(逢沢峰昭)

アスナロは、神奈川県内では箱根、小仏山地および丹沢の大山周辺において標本が採取されているが（林ほか 1961^{*}, 神植誌 2001）、いずれも植栽されたものか、その逸出によるものと考えられ、神奈川県内には自生と判断できるものはなかった（神植誌 2001）。ただし、標本などの確実な証拠はないが、丹沢山塊の奥地にアスナロが自生する可能性を示唆する報告もあった。武田（1924, 1952）は、丹沢に生ずる珍しい植物としてアスナロを挙げ、「塩水沢の奥とかに周

囲十五六尺を算する巨大なものが生じるといふ」と、その伝聞を紹介している。また、近年、星ほか（1997）は、丹沢山の北方に位置する、太礼ノ頭、円山木ノ頭および本間ノ頭の三つの峰からなる「丹沢三ッ峰」において、アスナロを2個体確認したことを記録している。しかし、星らの確認した具体的な位置およびその分布状況は不明のままであった（持田 私信）。

筆者は、2003年5月に丹沢三ッ峰の一峰、本間ノ頭の北およそ400mの尾根上でアスナロの落枝を拾って以来、丹沢三ッ峰にアスナロが自生するのではないかと予想してきた。そして、本年4月中旬の落葉期に行った探査により、本間ノ頭周辺にアスナロの自生群落を発見することができた。一箇所は、本間ノ頭の西斜面のブナを主体とし、ウラジロモミ・ヒノキが点在する林内（標高1,300m）であり、胸高直径20cm、樹高10m前後のアスナロを10個体程度確認することができた（下図）。2箇所目は、国土地理院の2万5000分の1地図上において、本間ノ頭から北に300mくらい（地図上では1.2cm）のところにあり、2つのガレに挟まれた小尾根上である（標高1,280m）。ここでは11個体からなる、まとまった



本間ノ頭の西斜面に生育するアスナロ。



左：本間ノ頭の北の小尾根上に発達したアスナロ群落（ガレの左にある群叢，右端の針葉樹はツガ），右：アスナロの鱗片葉（左の写真と同一の場所）。

アスナロ群落を発見することができた（上図）。この群落はおそらく同一クローン（無性生殖個体）からなるものと思われる。この群落中には、地際直径およそ 50cm，その上部で多数の幹を分岐している個体があり，今回調べた個体の中で最もサイズの大きなものであった。その他の個体は，胸高直径 5-20cm，樹高 8m 程度であり，周囲のサラサドウダンの密生する低木層内には実生も見られた。また，この群落内の個体の中には，アスナロてんぐ巣病（あすなるひじき）が発生したものがあつた。3 箇所目は，本間ノ頭から宮ヶ瀬湖金沢橋に伸びる尾根（通称：榎立尾根）と，本間ノ頭から丹沢観光センターに下る踏み跡とが分岐するやや手前のやせた尾根上のブナ・ウラジロモミ林である（標高 1,255m）。ここでは胸高直径 5-10cm，樹高 3-5m 程度のアスナロ 3 個体を発見することができた。以上のような生育場所およびその環境から判断して，これらのアスナロは自生のものと考えられる。

今回の探査により，アスナロ 20 個体程度を確認することができた。時間の都合上十分な調査はできなかったが，本間ノ頭の西斜面にはさらに多くの個体が生育していると思われる。アスナロは関東周辺においては奥日光や那須塩原地方など主として多雪山岳に多くみられるが，太平洋側の山岳において，このようなまとまった個体群を発見できたことは特筆に値するだろう。今後は丹沢山塊における個体数並びに生育地環境を記載するとともに，関東地方の太平洋側の

山岳におけるアスナロの分布を調べ，別途報告する予定である。なお，採取した標本（特別保護地区外と思われる）は県博に収めた（KPM-NA0125164～9）。

本調査を進めるにあたり，横浜国立大学の持田幸良教授より文献情報並びに調査に対する励ましを頂いた。心よりお礼申し上げます。また，標本調査を快諾くださった森林総合研究所多摩森林科学園（TFA）の関係者各位，標本の収蔵に当たり便宜を図っていただいた生命の星・地球博物館（KPM）の植物担当学芸員の皆様，本報作成に際しご助言をくださった東京大学大学院梶幹男教授に感謝申し上げます。

* 林ほか(1961)の丹沢山塊の植物目録中には，アスナロの分布地として，「大山，三峯，稀」とある。TFA には，この記載の基となったと思われる大山の標本のみがあつた〔アスナロ：神奈川県大山 1953. May 林 弥栄；相州大山 1953. Jun. 21 小林義雄〕。「三峯」については，アスナロのほかにはヒノキの産地としても記載があり，丹沢三ッ峰なのか，あるいは大山の北東にある三峰山（標高 935m）を指すのか明確ではない。ただし，同文献の植生調査表中には丹沢三ッ峰を指すと考えられる表記として，「津久井郡下の丹沢山三ッ峯」あるいは「丹沢三ッ峯」を用いていることから，「三峯」は，おそらく大山の三峰山を指しているのではないかとと思われる。三峰山付近では，神植誌 2001 の調査でも標本が採

取されているようだ (ACM-023303 藤田千代子 1997.5.17).

引用文献

- 星 直斗・山本詠子・吉川菊葉・川村美岐・持田幸良・遠山三樹夫, 1997. 丹沢山地の自然林. 丹沢大山自然環境総合調査報告書, pp. 175-257. 神奈川県.
- 林 弥栄・小林義雄・小山芳太郎・大河原利江, 1961. 丹沢山塊の植物調査報告. 林試研報, 133: 1-128.
- 神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物誌 2001. 1584 pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原. (本文中では " 神植誌 2001" と略記)
- 武田久吉, 1924. 丹沢山塊略説 (三) 科学知識, 4: 524-533.
- 武田久吉, 1952. 丹沢の山と溪. 275 pp. 山と溪谷社, 東京.

丹沢三ツ峰にシラビソの若木を発見す (逢沢峰昭)

林 弥栄氏は, 1955 年 8 月丹沢山塊において, 塔ヶ岳東方 1,400m 付近のダケカンバ, カラマツ, ノリウツギなどの生育する低木林内で, 高さ 50 ~ 60cm のシラビソが数本生じているのを発見した (林 1956). また, このとき撮影された写真は林ほか (1961) に, 採取された標本は森林総研多摩森林科学園 (TFA) に収蔵されている (逢沢 2003). 筆者は, 関東周辺山岳における亜高山性針葉樹の分布調査の結果から, 丹沢山塊のシラビソは自生するものではなく, 人為的な植栽に由来するものと結論づけてきた (逢沢 2005). ところが, 本年 4 月中旬に丹沢三ツ峰において, シラビソの若木 (胸高直径 2cm, 樹高 130cm) を発見した (写真 1). シラビソを発見した場所は, 本間ノ頭から北にのびる尾根上の西斜面であり, 本間ノ頭から北へ水平距離で 300m の地点 (国土地理院の 2 万 5000 分の 1 地図では本間ノ頭から北へ 1.2cm, 標高 1,280m) である. 斜面の直下のガレに挟まれた小尾根上にはアスナ



図 1: シラビソの若木, 図 2: 周囲の樹木に被圧されており, 葉量は少ない.

ロ群落 (p. 766 参照) がみられる所である. ここでは, ブナが林冠を占め, 低木層はサラサドウダンが密生していた. 発見したシラビソの若木は, 周囲のサラサドウダンに被圧され, 葉量は少なく (図 1; 2), 幹にはシカによるものと思われる被食痕がみられた. シュートの形態を確認したところ, 褐色の毛があること, ウラジロモミの枝に見られるような針葉の基部からのびる線上の溝がないこと (図 3; 4), 針葉の先端の 2 裂と針状の鋭い尖りもなく, モミの被圧木でもないことなどから, 確実にシラビソと同定できる. 母樹とみられる親木の存在は確認できなかった. また, 発見場所の生育環境を考えると, 到底人為的に植栽された

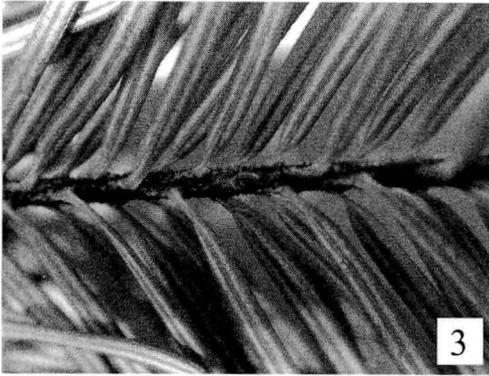


図3：シュートの拡大図（褐色の毛がみられる）、
図4：シュートの拡大図（ウラジロモミに見られるよ
うな針葉の基部から線上にのびる溝は見られない）。

ものとは考えられなかった。林（1956）には、林氏がシラビソを発見する4年前に、丹沢植物研究者の小島俊郎氏が丹沢山山頂から高旗山（筆者註：高畑山と思われる）に下る途中で採取したというシラビソ標本を、林氏がみせてもらったことが記述されている。小島氏が採取した場所は、今回シラビソを発見した場所に近い。また、林氏の採取したシラビソも今回発見したシラビソもいずれも若木である。これまでシラビソの大径木が確認されていないことから推論される一つの可能性として、丹沢の高所に富士山などからホシガラスなどの鳥類によってシラビソの種子が持ち込まれ、若木の段階まで生長し、その後枯死しているのかもしれない。今回の発見で、丹沢山塊にシラビソが自生することを実に50年ぶりに再確認することができた。しかし、果たしてどこかに母樹があって更新が起きているのか、あるいは別の山塊から種子が持ち込まれることによる一過性のものに過ぎないのかについては、今のところ不明

である。今後母樹の探索が必要になる。今回発見したシラビソの枝の一部は、標本として県博（KPM）に収めた。

最後に、標本の収蔵に当たり便宜を図っていただいた生命の星・地球博物館植物担当学芸員の皆様、本報作成に際しご助言をくださった東京大学大学院梶幹男教授に感謝申し上げます。

標本：シラビソ，神奈川県津久井郡津久井町本間ノ頭の北300mの付近，北緯35°29'47.9"，東経139°10'51.3"，標高1,280m，2006 Apr. 22，逢沢峰昭（KPM-NA0125163）〔Hab:ブナ林内のサラサドウダンの密生する低木層内に，被圧された若木（DBH=2cm，H=130cm）1個体を発見〕

参考文献

- 逢沢峰昭，2003。「林ほか（1961）：丹沢山塊の植物調査報告」の標本について．FLORA KANAGAWA, (55): 673-683.
- 逢沢峰昭，2005. 証拠標本と生育地確認に基づいた分布記載の再構築—本州産亜高山性針葉樹5種を例として—．植物地理・分類研究，53: 13-42.
- 林 弥栄，1956. シラベ神奈川県丹澤山集に産す．植物研究雑誌，31(1): 21.
- 林 弥栄・小林義雄・小山芳太郎・大河原利江，1961. 丹沢山塊の植物調査報告．林試研報，133: 1-128.

大和市上和田（宮久保）の帰化植物 （松本雅人）

2006年6月29日、牛糞の堆肥を多量に使うトウモロコシ畑のまわりを歩いてみた。エノコログサ類やヒエ類が多くみられた。エノコログサ類はアキノエノコロで、全体に大きなアメリカ型である。ヒエ類はコヒメビエ *Echinochloa colona* (L.) Link で、100株以上があった。コヒメビエは神植誌2001では第一苞類の長さなどをキーにしている。この形質だけでは同定に自信がもてなかったが、ヒエ、ヒメイヌビエ、イヌビエ、タイヌビエ、の各標本と比較したところ、次の2点で明確に区別できることがわかった。

①コヒメビエは全体に紫色を帯び、場合によっては茎葉に紫色の斑紋を出す。

②他のヒエ類は花序の枝と軸に基部が乳頭状にふくれた長毛があるが、コヒメビエでは短毛はあっても基部のふくれた長毛はない。

この特徴については、これまでの図鑑や文献には明記されていないが、フィールドでも確認しやすく、この2点が確認できれば、コヒメビエの同定はそれほど困難ではない。

以下、上和田で記録された外来種を報告する(50音順)。

・イネ科の外来種

アキノエノコロ、アメリカノキビ、イヌムギ、コスズメガヤ、コヒメビエ、セイバンモロコシ、ツルスズメノカタビラ、ティフトンシバ、ニワホコリ？、ネズミムギ。

・イネ科以外の外来種

アメリカセンダングサ、イガホビユ、イヌビユ、ウラジロチチコグサ、オオアレチノギク、オオイヌホオズキ、オオニシキソウ、オオホナガアオゲイトウ(♂, ♀)、オニノゲシ、クルマバザクロソウ、コアカザ、ゴウシュウアリタソウ、コギシギシ(外来?)、コニシキソウ、セイヨウオオバコ、セイヨウタンポポ、ゼニバアオイ、チチコグサモドキ、ノボロギク、ハキダメギク、ハリゲコウゾリナ、ヒメシロビユ、ホソアオゲイトウ、ホナガイヌビユ、ミナトアカザ、ムラサキウマゴヤシ。

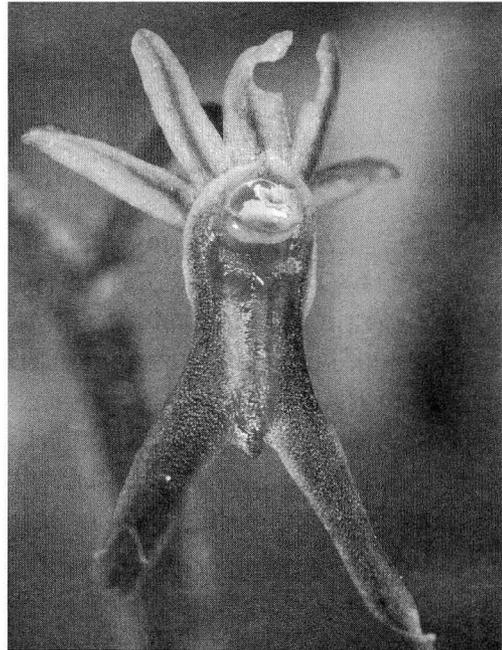
※参考に同所にあった在来植物を紹介する。

・イネ科

アキノエノコロ、イヌビエ、エノコログサ、オヒシバ、ケイヌビエ、コメヒシバ、スズメノカタビラ、ニワホコリ、ヒメイヌビエ、メヒシバ。

・イネ科以外

イヌホオズキ、イヌガラシ、エノキグサ、オオミチヤナギ、カタバミ、ザクロソウ、スギナ、スベリヒユ、トキンソウ、ハコベ、ハナイバナ、ハハコグサ、ハルノゲシ、ホトケノザ。



ヒメフタバラン。上：全体，下：花。

ヒメフタバランが健在

(勝山輝男)

このフロラカナガワと同時に「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」の植物篇の別刷が皆さんの手元に届いたと思います。その 88 ページにヒメフタバラン *Listera japonica* Blume が絶滅種とし

て掲載されています。印刷には間に合いませんでしたが、今春、ヒメフタバランの健在が確認できました。ヒメフタバランは 1953 年に箱根神山で採集された標本が生命の星・地球博物館にあり、愛川町三増峠の文献記録がありましたが、神奈川県植物誌 1988 および 2001 の調査では発見できず、今回の RDB では絶滅種とされました。

数年前に調査会会員の山本絢子さんと箱根大涌谷の近くを歩いた際、この近くにヒメフタバランがあったと教えてくれました。前回の RDB で神奈川県では絶滅とした記憶があったので、寄り道して見に行きました。しかし、そのときに見つからず、ヒメフタバランは幻のままになっていました。今春、山本さんが確認に行ったところ、花が咲いているとのことで、さっそく写真撮影に行きました。以前、見に行ったところと同じ場所に、今度は 10 数株のヒメフタバランが出ていて、写真のようなかわいらしい花を咲かせていました。

横浜市戸塚区でタシロランを発見

(亀谷邦雄・浜口哲一)

タシロラン *Epipogium roseum* は、葉緑素を持たない南方系のランで、『神奈川県植物誌 2001』(神奈川県植物誌調査会編 2001)によると、県内では 1970 年代までは三浦半島に稀産するだけであったが、近年湘南から西湘にかけての沿海地でやや普通に見つかるようになった。

筆者の一人、亀谷は 2006 年 7 月に戸塚区戸塚町において、本種を発見し、撮影を行った(表紙参照)。『横浜の植物』(横浜植物会 2003)によると、横浜市内の本種の記録は磯子区・青葉区・栄区の 3 例があげられているのみで、戸塚区としては初記録になると思われるので、報告することとした。生育地は、栄区金井町に隣接した、標高約 50m の丘陵地の尾根部で、アカガシなどの常緑広葉樹の多い暗い林分の中を通る踏み跡程度の道の路傍に合計 9 株が生えていた。

小原敬先生の著作について

(浜口哲一・長谷川義人・三輪徳子)

はじめに

小原敬先生は、長年にわたっての本会の運営委員を務めてこられました。堪能なロシア語を駆使した植物学史の研究者としても著名で、他の追従を許さない数多くの著作を発表してこられました。植物誌調査会では、その業績をまとめた形で後世に伝えるべく著作集の刊行を計画し、筆者ら 3 名が、その編集の任にあたることとなり

ました。

本稿は、今までに筆者等が把握できた範囲での小原先生の著作リストをまとめたものです。整理の都合上、「茅ヶ崎自然の新聞」所収の記事と、その他の著作の 2 つにリストを分けました。仮のリストですので、整理番号や年号別の枝記号はつけてありません。会員の方々の中で、ここに採録されていない著作をご存じの方がおられましたら、どんなに短いものでもけっこうですので、ぜひともお知らせをお願いいたします。また、その著作についてのコピーをお送り頂けると、今後の編集作業の中で役に立ちますのでよろしくご配慮ください。

なお、今回のリストを作成するにあたって、齋木操、竹内民江の両氏に著作の入手で大変お世話になりましたので、記して感謝いたします。

小原敬先生著作リスト 1 (118 編)

ここには、「茅ヶ崎自然の新聞」以外に発表されたものを収録しました。誌面の都合上、発行者の一部を省略しました。FLORA KANAGAWA は神奈川県植物誌調査会、はまかきらん(植物会会報)およびはまかきらん(植物会ニュース)は茅ヶ崎植物会、神奈川自然誌資料は神奈川県立博物館(現神奈川県立生命の星・地球博物館)の刊行によるものです。

小原 敬, 1965. 片瀬、江ノ島付近産ツノガイ類。平和教育, 2: 18-24. 平和文庫。

——, 1966. ソ連邦植物誌略語表。植物研究雑誌, 41(1): 25-32.

——, 1970. 日本にガンコウランが 3 種類ある — Vassiljev の新研究の紹介 —。植物採集ニュース, 5(50): 34-36. 植物ニュースの会。

——, 1973. 「中国高等植物図鑑」を紹介する。植物採集ニュース, 6(69): 98. 植物ニュースの会。

——, 1975. 日露植物交流雑記 I。年刊平和学園, 2: 73-80..

——, 1975. 茅ヶ崎植物会へのおさそい。(ちらし)。

——, 1976. 日露植物交流覚書(1)。窓, 19: 10-14. ナウカ。

——, 1976. 日露植物交流雑記 II。年刊平和学園, 3: 37-46.

- ,1976. 発刊の辞 . はまかきらん (植物会会報), 1.
- ,1976. 茅ヶ崎の植物学ぶ . 広報ちがさき, 1976年5月号 .
- ,1977. 日露植物交流雑記Ⅲ . 年刊平和学園, 4: 40-51.
- ,1977. 発刊に寄せて . はまかきらん (植物会会報), 2.
- ,1977. 湘南海岸のアメリカネナシカズラ . はまかきらん (植物会会報), 2.
- ,1978. 日露植物交流雑記Ⅳ . 年刊平和学園, 5: 21-30.
- ,1978. あとがき . はまかきらん (植物会会報), 3: 51-52.
- ,1979. 日露植物交流雑記Ⅴ . 年刊平和学園, 6: 14-25.
- ,1979. 湘南ブロック茅ヶ崎市, 寒川町. FLORA KANAGAWA, 2: 8.
- ,1979. 茅ヶ崎の一茎九花 . はまかきらん (植物会会報), 4: 2-5.
- ,1979. あとがき . はまかきらん (植物会会報), 4: 43-47.
- ,1979. 茅ヶ崎のシダ展 . はまかきらん (植物会ニュース), 2: 1.
- ,1979. 茅ヶ崎植物会 - 過去 - 現在 - 将来 . はまかきらん (植物会ニュース), 4: 1-3.
- ,1979. トゲナシアレチウリ . はまかきらん (植物会ニュース), 4: 3.
- ,1979. マムシグサとムラサキマムシグサ (カントウマムシグサ) の区別点 . はまかきらん (植物会ニュース), 4: 4.
- ,1980. 日露植物交流雑記Ⅵ . 年刊平和学園, 7: 21-38.
- ,1980. 湘南ブロック茅ヶ崎市, 寒川町. FLORA KANAGAWA, 3: 11.
- ,1980. 茅ヶ崎のイケイキュウカ . FLORA KANAGAWA, 5: 20-21.
- ,1980. 湘南ブロック茅ヶ崎市・寒川町から . FLORA KANAGAWA, 5: 22.
- ,1980. ヴィーチと神奈川植物 1. 神奈川自然誌資料, 1: 93-96.
- ,1980. 神奈川県立自然史博物館の設立を求める要望書 . はまかきらん (植物会ニュース), 5: 3.
- ,1980. 植物名 . はまかきらん (植物会ニュース), 7: 5-6.
- ,1981. 日露植物交流雑記Ⅶ . 年刊平和学園, 8: 47-65.
- ,1981. 湘南ブロック茅ヶ崎市 . FLORA KANAGAWA, 6: 29.
- ,1981. 茅ヶ崎のアメリカネナシカズラ . 神奈川自然誌資料, 2: 55-56.
- ,1981. ヴィーチと神奈川植物 2. 神奈川自然誌資料, 2: 61-62.
- ,1981. 鳥に因んだ植物名 . はまかきらん (植物会ニュース), 9: 1.
- ,1981. 鎌倉霊園付近のケイワタバコ . はまかきらん (植物会ニュース), 9: 2.
- ,1981. イワタバコ . はまかきらん (植物会ニュース), 9: 3.
- ,1981. ツルジュウニヒトエ . はまかきらん (植物会ニュース), 9: 3-4.
- ,1982. 日露植物交流雑記Ⅷ . 年刊平和学園, 9: 41-58.
- ,1982. レイジンソウの学名の命名者 . FLORA KANAGAWA, 13: 74.
- ,1982. ヴィーチと神奈川植物 3. 神奈川自然誌資料, 3: 5-8.
- ,1983. 日露植物交流雑記Ⅸ . 年刊平和学園, 10: 114-125.
- ,1983. 帰化植物のニューフェース・アメリカトゲミギク宮ヶ瀬に産す . FLORA KANAGAWA, 14: 84.
- ,1983. ヴィーチと神奈川植物 4. 神奈川自然誌資料, 4: 83-86.
- ,1983. 平和学園付近の植物 (その1). 野の花, 6: 10. 平和学園小学校 .
- ,1983. 平和学園付近の植物 (その2). 野の花, 7: 7-8. 平和学園小学校 .
- ,1983. 平和学園付近の植物 (その3). 野の花, 8: 8-9. 平和学園小学校 .
- ,1983. 平和学園付近の植物 (その4). 野の花, 9: 10-11. 平和学園小学校 .
- ,1983. 平和学園付近の植物 (その5). 野の花, 10: 11-12. 平和学園小学校 .
- ,1983. 58年によせて . はまかきらん (植物会

- ニュース), 14: 1.
- ,1984. 平和学園付近の植物(その6). 野の花, 11: 9-11. 平和学園小学校.
- ,1984. 日露植物交流雑記 X . 年刊平和学園, 11: 118-135.
- ,1984. アメリカトゲミギク追記 .FLORA KANAGAWA, 16: 98.
- ,1984. 新帰化植物アメリカトゲミギク(新称) 神奈川県宮ヶ瀬に産す. 神奈川自然誌資料, 5: 75-77.
- ,1984. ソ連の変形菌(1). 変形菌, 4: 6-11. 日本変形菌研究会.
- ,1984. オーストン. 洋学史事典: 118-119. 雄松堂出版.
- ,1984. サバチュ. 洋学史事典: 299. 雄松堂出版.
- ,1984. フォーチューン. 洋学史事典: 613. 雄松堂出版.
- ,1984. マキシモウイッチ. 洋学史事典: 670-671. 雄松堂出版.
- ,1984. 千支に因んだ植物. はまかきらん(植物会ニュース), 15: 7.
- ,1985. 日露植物交流雑記 XI. 年刊平和学園, 12: 108-119.
- ,1985. 在満 20 年の思い出. 満鉄中試会々報, 11: 57-59.
- ,1985. 年頭にあって. はまかきらん(植物会ニュース), 17: 14.
- ,1986. 日露植物交流雑記 X II . 年刊平和学園, 13: 129-154.
- ,1986. 発刊の辞. はまかきらん(植物会会報), 5: 7-8.
- ,1986. まごじゃくし. はまかきらん(植物会会報), 5: 17.
- ,1986. 茅ヶ崎を通過した植物研究者達. はまかきらん(植物会会報), 5: 91-117.
- ,1986. はまかきらん. はまかきらん(植物会会報), 5: 117-118.
- ,1987. 夕陽真紅に一熊岳城の思い出一. 熊岳城小学校同窓会名簿(創立 80 周年記念号).
- ,1987. 卯年に因んだ植物. はまかきらん(植物会ニュース), 20: 12-14.
- ,1988. 外国人による日本植物研究の歴史 ①『ドドネウス草木誌』の波紋. 日本の生物, 2(11): 17-20. 文一総合出版.
- ,1988. 外国人による日本植物研究の歴史② クライエルとマイステル. 日本の生物, 2(12): 17-20. 文一総合出版.
- ,1988. 神奈川県植物研究史(1) 余録. FLORA KANAGAWA, 25: 203.
- ,1988. 神奈川県植物研究史 1. 神奈川県植物誌 1988: 1344-1370. 神奈川県立博物館.
- ,1988. 佐藤孝一氏を悼む. はまかきらん(植物会会報), 6: 14-15.
- ,1988. 辰年に因んだ植物. はまかきらん(植物会ニュース), 22: 17-19.
- ,1988. 神奈川県植物研究史. はまかきらん(植物会ニュース), 22: 23-29.
- ,1989. 外国人による日本植物研究の歴史③ ケンペルの多大な功績. 日本の生物, 3(1): 37-40. 文一総合出版.
- ,1989. 外国人による日本植物研究の歴史④ ツェンペリーの労作『日本植物誌』. 日本の生物, 3(2): 45-48. 文一総合出版.
- ,1989. 外国人による日本植物研究の歴史⑤ ロシア, イギリスの日本植物調査事始め. 日本の生物, 3(3): 37-40. 文一総合出版.
- ,1989. 外国人による日本植物研究の歴史⑥ 輝くシーボルトの業績—最終回—. 日本の生物, 3(4): 37-40. 文一総合出版.
- ,1989. ペリー使節団と日本植物. 日本の生物, 3(7): 57-60. 文一総合出版.
- ,1989. 巳年に因んだ植物. はまかきらん(植物会会報), 7: 1-2.
- ,1990. 茅ヶ崎植物会創立 15 周年を迎えて. はまかきらん(植物会会報), 8: 1-2.
- ,1990. 午年に因んだ植物. はまかきらん(植物会会報), 8: 27-28.
- ,1991. 茅ヶ崎の博物館に望むもの. 資料館だより, 73: 4. 茅ヶ崎市文化資料館.
- ,1991. 未(ひつじ)に因んだ植物. はまかきらん(植物会会報), 10: 1-4.
- ,1991. 内田藤吉先生のお話を伺って. はまかきらん(植物会会報), 10: 4-7.
- ,1992. 語尾が—aceaeでない科名 .FLORA

- KANAGAWA,34: 376.
- ,1992. 神奈川県植物研究史補遺(1). 神奈川県自然誌資料,13: 75-76.
- ,1992. 植物閑話. はまかきらん(植物会会報),11: 1-2.
- ,1992. 申(さる)年に因んだ植物. はまかきらん(植物会会報),11: 3-4.
- ,1993. 『神奈川県植物目録』(1933)に記載されている茅ヶ崎産植物. はまかきらん(植物会会報),12: 1-8.
- ,1993. 防火樹. はまかきらん(植物会会報),12: 8-10.
- ,1994. 神奈川県植物研究史補遺(2). 神奈川県自然誌資料,16: 41-42.
- ,1994. リネーとロシアの博物学者リネー—ラックスマン—大黒屋光太夫—桂川甫周. リネーと博物学—自然誌科学の源流—: 125-130. 千葉県立中央博物館.
- ,1994. リネーとロシアの博物学者リネー—ラックスマン父子—大黒屋光太夫—桂川甫周(国瑞). リネーと博物学—自然誌科学の源流—(改訂版): 125-129. 千葉県立中央博物館.
- ,1994. 湘南の渚にて(1). 小出川,19: 4-5. 小出川の自然に親しむ会.
- ,1994. 湘南の渚にて(2). 小出川,20: 4. 小出川の自然に親しむ会.
- ,1994. オハツキイチョウの分類学的位置. 文化資料館調査研究報告,2: 16. 茅ヶ崎市教育委員会.
- ,1994. 湘南地方の植物と塩害. はまかきらん(植物会会報),13: 26-28.
- ,1995. 『新編相模国風土記稿』に記載されている茅ヶ崎の物産. はまかきらん(植物会会報),14: 1-2.
- ,1995. ルーペの話. はまかきらん(植物会会報),14: 3-4.
- ,1996.20周年記念号の発刊について. はまかきらん(植物会会報),15: 5-6.
- ,1996. ニセアカシアと元大連市長石本鑽太郎. はまかきらん(植物会会報),15: 23-25.
- ,1996.[追記]リネーについて. はまかきらん(植物会会報),15: 26-28.
- ,1996. ズブローファカ(ズブロッカ). はまかきらん(植物会会報),15: 64-68.
- ,1996. 植物名を考える①. はまかきらん(植物会会報),16: 24-29.
- ,1999. 花式図について. はまかきらん(植物会会報),19: 13-15.
- ,1999. トラに因んだ植物. はまかきらん(植物会会報),19: 16.
- ,2000. 植物分類群とその語尾. FLORA KANAGAWA,49: 572.
- ,2000. 植物分類群の単位とその語尾国際植物命名規約. はまかきらん(植物会会報),20: 1-5.
- ,2001. 神奈川県植物研究史(1)<改訂追補>. 神奈川県植物誌2001: 1457-1477. 神奈川県立生命の星・地球博物館.
- ,2002. グミ科 *Hippophae rhamnoides* L. の和名. 植物研究雑誌,77: 119.
- ・齋木操・齊藤溢子・三輪徳子,2004. 行谷宇大島・文教大学湘南校舎の植物. 文化資料館調査研究報告,12: 1-8. 茅ヶ崎市教育委員会.
- ,2005. 我が家のルーツ. 満鉄中試会々報,31: 47-48.
- ,2005. 満州事変. 満鉄中試会々報,31: 49-50.
- ,2006. 平塚市博物館創立30年によせて. わた博: 46. 平塚市博物館.

小原敬先生著作リスト2 (113編)

- ここには、「茅ヶ崎自然の新聞」に発表されたものを収録しました。「茅ヶ崎自然の新聞」は1982年に茅ヶ崎市文化資料館によって発刊された月刊誌で、茅ヶ崎市の動植物や自然現象について多くの市民が投稿してきましたが、小原氏は、この誌面に多くの記事を書かれ、指導的な役割を果たしてこられました。なお、このリストでは誌面の都合上、著者名と誌名などは省略しました。すべて著者は小原氏で、誌名は茅ヶ崎自然の新聞、発行者は茅ヶ崎市文化資料館です。
1983. 文教大学建設予定地の植物調査. 8: 1.
1983. ウラゲワレモコウ行谷に. 8: 3.
1984. 文教大学予定地の植物. 12: 1.

1988. ナミベリハスノハカシパンについて . 63: 10.
1990. サークル紹介 - その 3 - 茅ヶ崎植物会 . 92: 19-20.
1991. ケオオバイボタ . 101: 7-8.
1991. ひばりが丘のニセアカシアと石本鑽太郎 . 102: 8-9.
1991. 茅ヶ崎のアリジゴク . 103: 4.
1993. レッド・データ・ブックに収蔵されている茅ヶ崎の植物 . 127: 6-7.
1995. ネズミ年に因んだ生物名 . 155: 13.
1999. 巣箱について . 196: 5.
1999. 微小貝の採集法 . 196: 11.
1999. スズランとドイツスズランの区別 . 197: 10.
1999. アカザ, オカヒジキ, ホソバハマアカザ . 199: 2.
1999. 神馬藻 . 199: 10.
1999. コウボウ (香茅) . 199: 12.
1999. 茅ヶ崎付近の活断層 . 200: 5.
1999. 茅ヶ崎海岸のチヨノハナガイ . 200: 8-9.
1999. 老神温泉でチヨノハナガイの化石を採る . 200: 17.
1999. ケナフ . 201: 6-7.
1999. 放生会とスズメガイ . 201: 8.
1999. 茅ヶ崎のオオミズゴケ . 202: 4.
1999. シロバナカワラナデシコ . 202: 4.
1999. アイグロマツ? 202: 4.
1999. 茅ヶ崎の海岸に生えるススキ . 202: 12.
1999. 湘南海岸の潮目 . 203: 3.
1999. 関東大震災のとき湘南海岸を襲った津波 . 203: 3.
1999. エニシダの実は食べられるか . 203: 10.
2000. 片瀬海岸のハイガイ . 204: 9.
2000. ツルムラサキ . 204: 13.
2000. 桜井欽一先生 . 205: 9-10.
2000. ゴム植物 . 205: 19.
2000. ニセアカシアとベッコウタケ . 206: 8.
2000. 茅ヶ崎付近の活断層 (続き) . 206: 12.
2000. ヤカドツノガイとムカドツノガイ . 207: 10.
2000. コフキササルノコシカケ . 207: 10.
2000. ソメイヨシノと天狗巣病 . 207: 12.
2000. 油石 . 208: 6.
2000. 西丹沢の黄鉄鉱と方鉛鉱 . 208: 6.
2000. 二宮海岸のカンラン石 . 209: 11.
2000. 牡丹石 . 209: 11.
2000. 帰化植物イヌキクイモ . 210: 2.
2000. 湘南地方の帰化植物①セイタカアワダチソウ②コバンソウ③シヤクチリソバ . 211: 11.
2000. 湘南海岸のサクラ貝の仲間 . 212: 8.
2000. 湘南地方の帰化植物オオキンケイギク . 212: 9.
2000. アマドコロ属の植物 . 213: 8.
2000. 134 号線沿いのアマドコロ . 214: 6.
2000. 小和田海岸のホンクマサカガイ . 214: 11.
2000. 穂状花序 . 215: 7.
2001. 植物の種内分類単位 (1) . 216: 6-7.
2001. 植物の種内分類単位 (2) . 217: 13.
2001. ベニガクスミレ (1) . 218: 5-6.
2001. 辻堂・茅ヶ崎の食用キノコ . 218: 13.
2001. ベニガクスミレ (2) . 219: 2-3.
2001. イソギク . 220: 3.
2001. 公害に遭って . 220: 11.
2001. アオカビの生えた木材は腐らない . 220: 12.
2001. 雲龍柳・古代ハスの実・三葉虫 . 221: 4-5.
2001. 満州植物研究史に始まり神奈川県植物研究史で終わる . 222: 8.
2001. 植物と塩害 . 223: 11.
2001. シーボルトかジーボルトか . 224: 3.
2001. 植物標本をめぐる . 224: 6-7.
2001. ハエドクソウとその有効成分フリマロリン . 225: 3.
2001. ツェンベルグかツェンベリーか . 225: 6.
2001. リンネとは俺のことかとリネー言い . 225: 6-7.
2001. ケヤキによる花粉症 . 226: 8.
2001. メキシコマンネングサ . 226: 10.
2001. ニセアカシアのポリフェノール . 227: 9.
2001. カロリナアオイゴケ . 227: 9.
2002. ウメの語源 . 229: 1.
2002. スナヅグミ . 229: 6-7.
2002. チャイ (茶葉) . 230: 9.
2002. 植物の遺伝子の保護 . 231: 11.
2002. ホソノゲムギ (帰化植物) . 232: 10.
2002. 植物の種 (シユ) の学名 . 233: 3.
2002. アメリカネナシカズラの学名の変遷 . 234: 9.
2002. 辻堂富士見ヶ丘のハルニレ . 235: 11.
2002. ヤーシカゴロシ . 235: 13.
2002. 辻堂海岸のドクウツギ (毒空木) . 236: 3.
2002. 平和学園のクララ . 237: 2.

2002. 大平台のフシグロセンノウ. 238: 2.
 2002. クマガイソウ（熊谷草）の名前. 239: 5.
 2003. 変形菌類（粘菌類）. 240: 6.
 2003. キョウチクトウ（夾竹桃）. 241: 7.
 2003. 辻堂のヤブザクラ. 242: 4.
 2003. 茅ヶ崎平和学園の変形菌. 243: 9.
 2003. 藤沢市辻堂の変形菌. 244: 5.
 2003. 茅ヶ崎の温量指数. 245: 3.
 2003. クサレダマ（サクラソウ科）. 246: 3.
 2003. 細胞性粘菌. 247: 3.
 2003. モントレーのアワビ. 248: 5.
 2003. 茅ヶ崎のヒツパハギ. 249: 4.
 2003. 茅ヶ崎の変形菌ツノホコリカビ. 250: 4.
 2003. ルイセンコ著「生物学の現状について」.
 251: 4.
 2003. 茅ヶ崎のウラゲワレモコウ. 251: 8.
 2003. ヘビ島（旧関東州）のmamushi. 251: 8.
 2004. 旅順のウズラ. 252: 7.
 2004. 長白山の生物. 252: 9.
 2004. 満州のリンゴ. 253: 4.
 2004. 満州のサクラ. 254: 5.
 2004. 旧満州の博物館. 255: 6-7.
 2004. 遼東の豚（いのこ）. 256: 4.
 2004. 昆虫少年 K・H 君. 258: 9.
 2004. 南満州でカササギを見る！ 260: 7.
 2004. ムシトリナデシコ. 261: 7.
 2004. ハツタケで思いだすこと. 262: 13.
 2005. 自然災害. 263: 4.
 2005. 湘南のコフキサルノコシカケ. 265: 7.
 2005. 平和学園附近の自然. 267: 6.
 2005. 茅ヶ崎のコバンソウ. 268: 4.
 2005. マリーズが訪ねた横浜の園芸家アカサブ
 ロー. 269: 8.
 2006. 植物の種の学名. 271: 9.
 2006. ユリウス暦とグレゴリオ暦. 271: 9.

横浜ブロックからのお詫びとお知らせ （堀川美哉・木智憲治・田中徳久）

横浜ブロックの活動拠点は横浜市こども植物園ですが、残念ながらこども植物園には、標本管理の職員が配置されていません。そのため、現在では、横浜植物会の運営委員が中心となり、月

に数回、標本の受入やデータ登録、配架などの作業を行っています。この状況は、1990年代に同園所蔵の「宮代周輔コレクション」の整理作業を横浜市から委託されたことにより始まりました。

『神植誌 01』刊行のための調査が始まり、県立博物館が小田原に移転したため、横浜市内に新しい拠点が必要になった際、横浜市こども植物園に横浜ブロックの活動拠点をお願いし、ブロックの事務局を横浜植物会の運営委員が引き受けたのは、このような経緯があったためです。

ですが、『神植誌 01』刊行後、横浜ブロックの会員の皆さんには申し訳ないことに、横浜ブロックとしての活動は休止していながら、こども植物園では、横浜植物会による標本整理作業が進められているという、変則的な状態にありました。一部の横浜ブロックの会員の皆さんには、標本の受入や作業についてのお知らせが届いていなかったのです。このことは、横浜ブロックの事務局を横浜植物会の運営委員が兼ねていることによって混乱してしまったもので、横浜ブロックで活動されてきた会員の皆さんには深くお詫び致します。

とは言え、このような至らない事務局ではありますが、『神植誌 01』刊行後も、一部の方たちは補充調査を進められ、その標本は順調にデータ登録などの作業が進み、先ごろ刊行された『神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006』に生かされているものもあります。横浜ブロックの皆さんにも、今後ともご協力いただければと思います。

なお、前述のようにこども植物園では標本管理の職員がいないため、標本の受入などは、横浜植物会が標本整理を行っている作業日に限られます。現在、決まっている作業日は、8月19日（土）、9月5日（火）、16日（土）になりますが（原則的に第1火曜日と第3土曜日）、念のため事前に堀川（TEL:045(333)4964；horikawa@now.mfnet.ne.jp）または田中（TEL:0465(21)1515；tanaka@nh.kanagawa-museum.jp）にご確認頂ければと思います。また、合同での補充調査については、皆さんのご意見を聞きながら、来年からの再開に向け、検討したいと思います。※今後のブロックからの連絡のため、名簿を再整理したいと思います。横浜ブロックでの調査にご協力いただける方は田中までご一報ください。

『神植誌 01』刊行後の横浜ブロックの標本登録実績

(田中徳久・高橋秀男・堀川美哉)

横浜市こども植物園では、横浜植物会の運営委員が中心となり、『神植誌 01』刊行後も引き続き標本の受入、登録などの整理作業を継続している。横浜ブロックとの関わりについては、別に「横浜ブロックからのお詫びとお知らせ」で記したように不適切な部分もあったが、これまでの実績として、その登録実績を報告したい。なお、調査会としては神奈川県内産の標本の取り扱いが重要であるが（横浜ブロックとしては横浜市内産）、標本庫としては県外のものも含め収蔵、管理しているので併せて報告した。

表 1 に年ごとの登録実績を示した。横浜ブロックの活動拠点として、横浜市内産の標本が多いのは当然であるが、これまで個人で所蔵していた県外産の標本も持ち込まれ、県外産の標本の割合も高い。なお、登録された標本の採集年月日は、個人で所蔵していた古い標本から、新たに採集された新しい標本までさまざまである。

表 2 には、区ごとの登録実績を示した。現在、横浜ブロックの会員の方の中に、勢力的に都筑区で補充調査を実施されている方がいる関係で、都筑区の標本の登録件数が多い。横浜市では、『神植誌 88』刊行後、分区が行なわれており、『神植誌 88』の基礎となった標本の産地が隣接した別の区（調査メッシュ）に位置したため、標本の蓄積量に大きな影響があった区が存在する。都筑区もその一つであるが、他に港北区や青葉区などでも補充調査を行いたいところである。

なお、この他、整理途上の「伊達健夫コレクション」も登録されつつあるが、別に報告する。

最後になり恐縮だが、標本のデータ登録にご尽力頂いている掛札宏道氏と鈴木照夫氏、標本の受入や配架などの整理作業を行っている横浜

表 1. 年ごとの登録件数

	2001	2002	2003	2004	2005	2006	計
横浜	152	68	232	205	253	537	1447
県内	316	67	88	20	44	28	563
県外	355	449	345	166	139	149	1603
計	823	584	665	391	436	714	3613

表 2. 区ごとの登録件数

鶴見区	56 点	神奈川区	135 点
西区	9 点	中区	27 点
南区	11 点	港南区	69 点
保土ヶ谷区	39 点	旭区	13 点
磯子区	6 点	金沢区	77 点
港北区	8 点	緑区	204 点
青葉区	11 点	都筑区	477 点
戸塚区	123 点	栄区	94 点
泉区	52 点	瀬谷区	36 点

植物会の運営委員の方々ほか、関係する各氏にお礼申し上げる。

2006 年度総会報告

2006 年度の総会は、4 月 22 日（土）に、本会会員の内山 寛さんの職場である日本大学生物資源科学部で開催されました。城川代表のあいさつに続いて、2005 年度の報告がなされ、2006 年度の事業計画・予算が審議され、可決されました。その後、愛知教育大学の芹沢俊介先生から、「日本産ミゾソバ群の分類」というタイトルで、講演をしていただきました。先生は「日本の植物相はまだよくわかっていない開発途上である。多様性を理解するには、混生地で観察するのがよい」と話されていました。

● 2005 年度 事業報告

● 2005 年度 決算報告・監査報告

● 2006 年度 運営体制

● 2006 年度 予算

編集後記

県博では11月5日(日)まで、特別展「ふしぎな生きもの菌類 -動物?植物?それとも?-」を開催中です。肉眼で見られるキノコ、ルーペサイズの変形菌、顕微鏡でないと見られないカビを展示しています。発酵食品のコーナーは勝山さんの力作です。

この特別展の開催に併せて、様々な菌類を写真で紹介した小冊子「身近な菌類の観察」を作成いたしました。菌類の代表的な生活場所と、各分類群の身近な種などを紹介しています。写真は小田原市入生田を中心に、県内で撮影したものがほとんどです。A5判オールカラー、133ページで1,000円(税込)です。博物館のミュージアムショップで購入できます。

また、今回、植物篇の別刷をお送りした、『神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006』も同ショップで2,000円(税込)で販売しています。10余年ぶりに発行された、神奈川県版のレッドデータブックの改訂版です。レッドデータ種の標本を採集された会員のみなさまには、昨年度、アンケートに協力いただき、現地の状況などの情報を提供していただきました。